

常射之卷

七

一貫流射術常射之卷七

目錄

射事之部

射初

弓場始 卷藁射樣圖一品

新造弓場始

御所的

百手的

奉射

鬮的

三的

迂的

京的
勸進的

江戸的

射上

三河的

興的

置的

的星数々懸

圖
四
品

勝負別的

一貫流射術常射之卷七

射事之部

射初

流傳曰射初ト云ハ男子始テ弓矢ヲ執テ其技藝
學初ルヲ射初ト云ナリサレト射禮ノ故實ヲ主
タル足利將軍ノ頃ノ小笠原家ノ古書類ニ不見
當此家柄ノ書ニ見サル事ナレハ古クハ射初ノ
式トヤラ云モノ別ニアラサルニヤ能ク知ラン
人ニ尋ヘシ近世ノ板本射法一統ニ弓初の作法
家々の説異といへ共其要ヲ提ニ大概違亘ナシ

然るを何れの家傳をも不知弓始を的始とは一
事のやうに覺て遇る人あり淺間敷亶也射初と
いふは的場を新に構是にて初て射初る事也弓
始と云は人生て八歳にして弓矢を取初る義也
尤和漢ともにかわる事なし吉日良辰を撰前日
より潔齊して座敷内床になり共床のなき座敷
ならば高案をこしらへ神前を構へ尤未明に沐
浴すへし上下を着る

圖說

端出繩を引

青幣

供御

てらし

神前

三寸

白幣

供御祝詞

くわへ

弓矢此方にたてかけて置へし

いづれも神前の稀様は八幡棚の圖の所に委有
之扱神前に向ひ弓矢の冥助を祈次に師矢を取
て觀念して弟子に渡す弟子両手にて請取戴き
右の脇にかひこみ次に師弓を取て渡す右のこ
とく戴左の脇にかひこみさて巻わらに向ひ蹉
一度立一度又踞一度にして射おはるへし其時

介士三寸神前よりおろし師の前に置師三方の上かはらけを取三寸を戴弟子にさす弟子三寸をいたゝく其時師肴をすゝむ吞て師へかへす師是を吞時弟子肴を進扱連座あらは師よりさへしなしは納て置へし是法式武内宿禰さためおかれしと也装束には昔とは違ふと云共法例申めくちかふへからすさて此時師弟より○に音物有へし師は弓か矢か其外何にても武具たるへし弟子よりは時服やらのたくひ時の宣にまかすへしト見へタリ此弓始ノ作法トヤラ云

モノハ小児ノ戯ニヒトシ腹ヲ抱ノ至ナリ決テ
大古ヨリ有シ作法ニハアラス私ノ愚ナル了間
ヲ以テ真言僧ナトニ便リ相談セシメ忘作シタ
ル作法ナリ其證ニハ是法式武内宿禰定置レシ
トアルニテモ考ヘシ武内宿禰ノ頃卷藁ト云モ
ノアリシニヤ無覺束卷藁ハ新名古ヘハ胴結ト
云モノニテ漸ク其名ノ見タル弓馬故實ニとう
ゆひと云事は本式にはなき物也何とこしらへ
てもくるしからすトアリ大ニ古ハ不見當武内
宿禰後世ニ及テ卷藁ト云モノ出來ル叟ヲ知テ

卷藁ニ向テ射初セル式法ヲ定ヘキ様ナシ己カ
猿知恵ヲ以テ作りタル射初ノ作法ナレハ人ノ
信サル莫ヲ恐レテ宿禰ノ名ヲ借タルモノナリ
武内宿禰コソ迷惑ト云ヘケレ又武射必用ニモ
射初といへるに愚あり矢場築初て射ると年の
始に射ると少年の人の生れて始て射るとなり
少年の人の射初といふは一生の稽古始殊に外
技藝違ひ弓執の弓を執始ル初禮ナレハ謹ムヘ
キ第一也先可射場所ニ卷藁を建師タル人此傍
に有ヘシ男子八歳にして弓射初をなす是故法

なり日置正次か歌に　男子八歳といふ幼春に
弓射初するものところそきけと詠せり男子生れ
て八歳の春正月吉日良辰を撰肩衣袴を着し脇
差を帯し可射ところへ出る介添矢執ともに肩
衣袴なり介添の人射児へ弓と矢を渡す弓は一
張弓矢は引目鏑なり射児弓矢を受取謹て内心
を正ふし其年のわうはんの方へ向ひ拝禮し怙
紙を出し其上へ引目鏑と段々に並へ其矢の上
へ一張弓を横に置退心の中に大己貴命八幡太
神と觀念し座に着介添弓矢を渡す射児これを

受取一禮す此弓は作形弓矢は羽角木なり師可
射旨を命す於是射児弓を左に持矢を右に手挟
師を拝し常の通に弓構し矢をつかひ巻藁を射
る兄矢弟矢を前後に射分る巻藁の間数は四尺
斗になすへし立て射児肩をいれ弓を横に介添
弓を受取矢は矢執とつて勝手へ入る師射児を
呼盃を与ふ師吞て射児に与ふ射児吞時弓矢に
ても引出物に出す射児頂戴にて左の方へ納め
又一献のみ師へ遣す此時殺を奉る又師吞て射
児へ与ふ射児のむ師殺を与ふ又師に奉る師の

みて盃を納るなり是を少人射初の式といふ的
を初て射初るにはさして子細なしト見へタリ
射法一統ニ記ス所トハ其次第少異アレトモ是
モ一流限ノ作法ニテ射術ノ極則本意ハ廢タリ
射術ノ主用ハ一筋矢ニテ堅甲ヲ貫キ鎧武者ヲ
射倒ヲ本意トセリ射初ハ此技術ノ口入ナレハ
式作法ノアルヘキ様ナシ然ハアレト今當ノ風
俗ナレハ高位貴人ナトノ射初二其次第ノナキ
モ如何ナレハ其家々ノ毎春弓始ノ桂例モアレ
ハ其作法ヲ用ヘテモ濟ヘキ事ナリ時宣ニ任セ

高位ノ人ノ兎角氣懸ニナラサルヤウニセルヲ
今日ノ禮トスヘシ必シモ私ノ作法ヲ猥ニ用ヘ
カラス憚ヘキ義ニテ大ナル失禮ヲ知ヘシ

弓場始 卷 藁 射 様

流傳曰弓場始ト云八年ノ始ニ弓ヲ射始ル夏ニ
テ弓始共射始共的始共云也其起源詳ナラス日
本紀ヲ見ルニ孝徳天皇ノ朝大化三年春正月戊
子朔壬寅射於朝庭トアルハ於朝庭弓場始ノア
リシナランカ是ヨリ猶昔天照太神宮ノ朝ニ弓
矢見ヘタレハ其技藝アルハ勿論ナレ氏射式ノ

行レタル_二更ハ不見射式ト覺キ更ノ見當タルハ
漸人王二十三代清寧天皇三年ノ紀ニ九月丙午
朔天皇御射殿詔百寮及侮表使者射賜物各有差
ト見エタリ此等ハ朝庭ニ行タル賭射ニテ其射
式モアレ_二任春ノ射始ノ更ハ不見當孝徳天皇ハ
人王三十七代ノ帝ナレハ清寧天皇トハ御宇十
三代モ隔アテハ此間ノ紀ニ春ノ射始ノ更紀落
シナランカ但シハ孝徳天皇ノ朝ニ始リタル更
カ詳ナラス能ク知ン人ニ尋ヘシ又武家ノ弓場
始ノ見ヘシハ東鑑文治四年正月六日ノ記ニ上

総介義兼猷椀飯相副馬五疋二品出御南面総列
自持参銀作劔御酒宴最中有御的始射手一番榛
谷四郎重朝和田太郎義盛二番愛甲三郎季隆橘
次公成ト云云此酒宴最中有御的始ト記タル文
義ヲ以テ考ルニ兼テ六日ヲ的始ト定メ置レシ
ニハアラス俄ニ思立テ的始アリシナランカ則
同号五年正月三日ノ記ニモ椀飯如例盃酒數巡
之後今日爲良辰之故可有御弓始之由被仰出先
先召下河辺庄司行平取弓箭進寄射場無左右蹲
踞于前方刷衣文此間堪能者一人可立逢之旨有

仰修理進秀長起座水著蹲踞于行平之後然而行
平更不進立二品覽其氣色亦召榛谷四郎重朝起
座隔居下行平興秀長之中時行平解紐取直弓進
立射之訖季長不及帰著本座上遜電云云此行平力
振廻レニテモ可知兼テ日限定リ行平力香ノ相手
後弓ハ季長卜定アルレ尅ナレハ行平力不足ハ不
可有此正月三日良辰ナレハ當日ニ至テ射手等
ヲ撰ミ即座ニ射始ノアリシレ尅明然タリ是ヨリ
下文ニ毎年正月ニ的始レ弓始レ射始レ弓場始
トモ見ヘタレトモ兼テ日限射手等ヲ定メ置レ

シニヤ即日ニ至テ俄ニ行ハレタルニヤ何共記
ナケレハ詳ナラス又建久五年五月九日建仁三
年十月九日建長三年十二月十四日建長四年四
月十四日ノ記ナトニ射始奥行アリタル事ノ見
ヘソハ正月ニ故障アリテ延引ニ成シトニヤ又
宗尊親王ノ治世ニ至テ正嘉二年正月十一日ノ
記ニ被撰定御的始射手以上十三人ニ五度也ト
アリテ同月十五日ノ記ニ射場始ノ式見ヘタレ
ハ宗尊親王ノ御代ニ及テハ疾ヨリ射始ノ日限
射手等ヲ撰ミ定置レシ様ニナリタルト見ヘタ

リ是ヨリ下文ニハ猶射手ヲ被撰後日ニ射場始
ノアリシ事所見少カラス又足利將軍家ノ射場

始ハ每歲正月十七日也小笠原家ノ古書類ニ

諸書

當用抄見ヘタリ此射場始ノ式ヲ主ル射手ヲ弓太

郎ト云ナリ重キ役ニテ私ニ定ルモノアラス弓

太郎ヲ勤ル仁躰ハ射術ハ不及云故實等會得シ

テ其氣量ノ備タル人ヲ撰ミ前年ノ十月ニ此役

ヲ命セラル、ナリ則諸書當用抄ニ射場始之儀

被仰出事毎年十月陰陽頭日次勘進申ス是舊例

也近年日數迫る被仰出之間渥齊稽古等之儀一

向無正躰者也御教書之文言之事

明春正月十七日弓場始之事

為弓太郎可被参勤之由所被

小射手之時ハ爲射手ト書之

仰作下也仍執達如件

年号月日管領之官判形有之

某殿

右使朝夕次郎左勝つ也トアリ朝夕ハ役名力詳

ナラス右ノ如ク其人ヲ撰ミ前年ヨリ弓太郎小

射手等命セ置レ

祐方云諸書當用抄ニ弓太郎者毎年以御教書被作出也後年者

小射手ハつ短冊被仰出の由小笠原前入道宗任元清後

祐方云土井利往ノ大式的註ニ朝夕トハ政所ノ仕丁也役名也弓場始ノ御教書ナト管領ヨリ射手方ヘツカハストキノ使ナトスルモノ也諸書當用抄ニ見ヘタ

元清

又六後任民申事也屋代四郎政貞法名連云備前申
部少補政清太郎小射手共初参の時斗御教書
事ふ可然弓太冊被作出也小笠原弥六政廣任後
也於後年しつ短冊被作出也政廣常の座敷壁二
刑部大補為弓太郎数ヶ年勤也政廣常の座敷壁二
法名宗霽為弓太郎数ヶ年勤也政廣常の座敷壁二
弓太郎被作出短冊如色紙押置之慥見本の由談
元同心の輩多しをかさわらきやうふのたいふ
とのまきて上にか様に書之

明春三月十七日弓場始事
小笠原刑部太補

ト見ヘタリ弓太郎小射手以短冊命レシモア
リシニヤ時刻射手ノ順ハ弓場始前日ニ以折紙
考ヘシニヤ時刻射手ノ順ハ弓場始前日ニ以折紙

相觸ラレシ同書二御的前の日如斯以折紙両奉

形よりお觸状也使は朝夕也合點してかへす方祐

云合點トハ拔名ニ
テ合點トハ拔名ニ

明日十七日弓場始之事

可爲午刻以前の由候

恐々謹言

正月十六日

貞通在判
爲規在判

諏訪信濃守
飯尾左衛門尉

小笠原刑部少補殿

佐竹彦三郎殿

毛利次郎殿

真下弥七郎殿

彦部左京寛殿

彦戸次郎殿

一番

おたけのいつみのかみ

ひこへのさこんのしやうけん

二番

すやままこ次郎

そかのひやうこのすけ

三番

みやのかみつけのすけ

かうのつしまのかみ

如斯も書也合点して廻すへし又下に奉といふ

字書ても遣すへしト見へタリ是レ足利時代ノ
古風ヲ察へシ今當ノ射家者流ノ者ノ射始ト云
モノハ卷藁ヲ射レトモ古代ハ五尺二寸ノ大的
也法量物鬮的聞書弓的ノ制射場ノ造様ハ前章
ニ述タレハ爰ニハ畧之射手人数ハ右ニ見へタ
ル如ク六人也第一ヲ弓太郎第二関ノ前第三弓
太郎ノ後弓第四関ノ後弓ト云是ヲ四ノ角ト云
テ勝タル射手ノ立所也射弓馬故實的出張記殘二
人ヲ小射手ト云ナリ射手ノ出立ハ折烏帽子ニ
烏帽子掛シ素襖袴ヲ着シ下ニハ時ニ順テアマ

夕モ着ヘシ幾枚着スル^ッ一胸ニ着ヘシ引違テ
著スル時ハ手ノ出入煩シ素襖ノ袖右ノ方ヲ糸

ニテトツル故實アリ以上の出張記
ニ見ヘタリ鞆卷ヲ帶シ

扇疊紙ヲ懷中シ沓敷皮ヲ小者ニ持セ弓ハ弓袋

入三度弓ノ時ハ替弓共ニ
六張ナリ五度弓モ是准矢ハ矢筒ニ入三度弓
ナラハ

三手五度弓ハ
五手持ヘシ中間小者ニ持搔副ノ侍ニ騎召連

射場へ臨ミアラ座ニ敷皮ヲシキ射手ノ揃ヲ侍

射手モ揃將軍弓場殿出御アリテ射手順書弓太

郎へ相渡サレ請取テ先弓太郎拝見シ夫ヨリ小

射手迄見終タラハ相手ト見合セ番ヒテ小アカリ

シテ式座ニツク

此時シキ皮ヲ折テシキヤウアリ

一番弓太郎同

後弓二番小射手前弓同後弓三番関前弓同後弓

数塚ノ手前ニ弓太郎同後弓ト向合テ左右ニ列

座ス搔副ハ射手ノ跡ニ扣居ル小射手関ノ前後

モ同之

祐方云棚ト数塚ノ間ニ列座セル事土井記見ユ

矢取幣振ハ棚ノ

後脇ノ方ニ在ヘシ射手銘々ニ疊紙ヲ取出シ其

上ニ扇ヲ角違ニナシテ敷皮ノ右ノ角ノ下ニ挟

置各疊紙扇ヲ納タラハ弓太郎合手ト目ト目ヲ

見合沓ヲカキヨセテ弓矢ヲ左右ニ取分テ持沓

ヲ左右ヨリハキ夫ヨリニシリ出テ合手ト一度

ニ立上リ数塚ニヨル前弓ハ数塚ニ弓ノ末弭ヲ
一尺斗掛テ畏ル後弓ハ数塚ノ根ニ弓ノ末弭ノ
ト、クト、カ又程ニ畏リ又合手ノ目ト目ヲ見
合一拍子ニ立上リ三足歩ミテ数塚ヲ己ガ前ニ
ナシ左右ノ足ヲ踏揃的ニ向テ立的ヲ一目見テ
左ノ足ハ前ニ踏出シスヘラサルヤウニ 右足ハ
後ニ踏開キ砂中能踏 数塚ト三金輪ニ立右ノ手
ニテ弓ノ鳥打ノ下ヲ矢ト共ニトラヘ本弭ヲ数
塚ノ根ニ弓杖ヲ突キ肩ヲ押脱キ衣モンヲ縫左
ノ手ニ又弓ヲ移シ握ヲ取テ弓構シ矢ヲ番へ打

起シ引静メ満固シテ早矢ヲ射ル後弓モ前弓ノ
如躰拝シテ矢ヲ番前弓ノ早矢ヲ射放ヲ待前弓
早矢ヲ射タレハ後弓早矢ヲ射ヘシ後弓早矢ヲ
射レハ又前弓乙矢ヲ射ルハシ前弓乙矢ヲ射タ
レハ後弓モ乙矢ヲ射ヘシ前弓ハ此間ニ如始右
ノ手ニテ弓鳥打ヲ執テ弓杖ヲ突キ肩ヲ入又左
手ニテ握ヲ執テ弓ヲ左ノ脇腰ニカイユミ的ヲ
一目見テ元ノ如ク数塚ニ弓ノ末弭一尺斗掛テ
畏後弓ノ乙矢ヲ射ルヲ待後弓モ乙矢射タレハ
前弓ノ如肩ヲ入弓ヲ納テ数塚ノ根ニ末弭ノト

、クト、カ又程ニ畏テ前弓ノ目ト目ヲ見合一
度ニ立上リ敷皮ノ上ニ退座スニ番ノ前弓後弓
数塚ニヨリ前ノ如躰拝シテ早乙ノ矢ニ筋ツノ
射終テ敷皮ノ上ニ退居シタレハ又三番関前後
同断一立濟ミ射手皆敷皮ニ座シタレハ矢取矢
ヲ取テ射手ノ後ニ持参シ銘々ニ矢ヲ渡ヘシ渡
様請取様作法アレトモ繁文ナレハ畧之各矢請
取タレハ又弓太郎相手ト見合立上_リ数塚ニヨリ
以前如躰配ス二度目ハ後弓ヨリ早矢ヲ射始也
後弓早矢ヲ射タレハ前弓早矢ヲ射ル前弓早矢

射タルヲ見テ後弓乙矢ヲ射ル後弓乙矢ヲ射タ
レハ前弓乙矢ヲ射ル此時後弓ハ初度ノ前弓ノ
如ク先ニ数塚ニ退キ畏テ前弓ノ乙矢ヲ射ルヲ
待以下以前ニ異ナラス三度目ハ又前弓ヨリ射
始ル四度目ハ又後弓射始ル五度目ハ又前弓射
始ルナリ幾度モ前弓後弓ト替々ニ射始ナリ三
度弓五度弓不定其時ノ定ニヨルヘシ多分三度
弓ナリ三度弓ニテモ五度弓ニテモ濟タレハ本
ノアラ座ニ弓太郎ヨリ引退ク又乙矢御免ト云
事アリ弓馬故實ニ乙矢御免と云事是は御所的

の時の事也五度弓の時九射中て残る乙矢を御
免有を云也三度弓にも五中りたる時の事也但
弓太郎せきのうしろに限たる事也弓太郎はあ
なたより御免ありせきのうしろはこなたより
申て御免あるなりト見へタリ乙矢御免一本ノ
矢不射シテ三度弓ノ時ハ六本皆中五度弓ノ時
八十本ノ皆中ニナルナリ又弓太郎ニ限ラス何
レノ射手ニテモ皆中セキ人へハ銀劔太刀御衣
扇鎧ナトヲ給ル事アリ鬮的聞書高忠聞書
別記ニ見へタリ是ヲ
禄ヲ給フト云ナリ又三年打ツ、キテ十ヲツ、
祐方
云ツ、
十

ト云ハ皆中シタシタル人ト十ヶ年打ツ、キテ
ルト云ハ皆中シタシタル人ト十ヶ年打ツ、キテ

御弓場始ノ射手ヲ勤タル人ニハ御恩賞ヲ給ル

也祐方云御恩賞ハ官位ヲス、メ或ハ所領是ヲ
ヲ増シ給ルナリト貞丈先生ノ説ナリ

参勤ノ労ト云ト云弓馬故實ニ見ヘタリ右ニ粗所

記ハ小笠原家ノ古書ニ見ヘタル赴ニテ足利家

ノ射場始ノ式也猶委シクハ附属ノ書伊勢貞丈

先生ノ大的式ウイ互見スヘシ又今當東武

御當家様ノ御射場始ハ正月十一日ナリ其御規

式ハ足利家ノ式トハ少シ差アリシニヤ貞丈雜

記ニ今の世正月十一日御射初の御規式も享保

年中

有徳院様

祐方云有徳院殿ハ吉宗公ノ御事ニテ八代目將軍也

御再興あり

し也此事室町將軍の代にありしか其後絶たり
しを

有徳院様右の射礼の書を御覧御吟味ありて其
書の式をわさにうつさせられ御扨従荒などに
射させて御覧ありて段々に御好みの儀共あり
て度し御改め有て終に成就して其式をは小笠
原縫殿助に下し語りて彼家にて諸士に教る事
に成たり古の式には射手数塚に寄て立時弓杖

をつくして弓の本はず数塚のこなたにつきて
両足と三かなわに成様にしたり今は本はずを
数塚のむかふにつくや右は数塚にきす付る事
を禁たり今は弓を数塚にかけ砂にすりこみて
弓をもたせて水干のひもとく也右は夜の御
的はかりに矢甲の彼人ありてあたりをつれを
申也今は書の御的に矢甲ありか様の事は皆上
乃御好みによる事なれば替り有へしト見へタ
リ猶ヲ知ラン人ニ尋へシ然ルニ今ノ世ノ射術
者流ナト云モノハ小笠原流ト名目ヲ偽リ卷藁

二附會ノ作法ヲ設ケ射始ノ式ナト、のし匄ル師範
 者モアレハ其門ニ遊フ人ハ益々誤テ春射始ハ
 卷藁ノモノト心得タレト古モ今モ將軍家ノ弓
 場始ノ式ハ如右卷藁ニアラス的ナリサレト將
 軍家ノ式ハ兔モ角モ今當ハ諸僉家ノ射初モ卷
 藁ヲ射ル風俗ニ成タレハ一概ニ凝付テハ差支
 亘モアルヘシ其故實ヲハ知テ時宣ニ順亘モア
 レハ小笠原流ト偽名冠シメタル卷藁ノ射様ヲ
 粗シ記ス小笠原射式ト云書ニ胴締射狀様之次第
 扇子疊紙ユカケを置決拾を懷中して矢を無名指小指

二ツにて角木を持弓を中指食指大指三ツにて
弦を下へして持御前に伺公に末弭を卷藁に向
弦御前へなし下に置矢を弓にならへて外竹の
方に置扱一足程退き御前を窺ひ駄与登御意有
は一禮して卷藁に向ひ鞞を差すへり寄左の膝
を突て右の膝をうけ常の如く矢を取手挟右の
弓持たることく三ツの指にて弦をつまみ前へ
引をこし左手にて弦の前より握を取弓を立右
手にて握の四五寸上を取左手を本弭に付右の
膝の通り二三寸前に弦を卷藁の方へ向前少横

たへ儲肩を脱袖を後より刀のさやを廻し前に
て挟前を刷て扱左へ弓を取移しくると廻し
手挟たる箭を番ひ弦に掛巻藁より弓杖ほと置
左右の足を踏ひろけ右の足をも踏直し踵と踵
と三六寸程に踏弓構して打起し駄放し駄様は
目錄のことし弦をくるしと前へ廻し右の如く
可駄爰にて足踏ニ口傳祐方云足踏ニ口傳ト云
例式ノ足踏ハ左足ヨリ
踏ム魔生ノモノ射ルニハ右足ヨリ踏ムト云
ナリ又矢聲ノ事不見巻藁ヲ射ルニハ矢聲ヲ掛
ル法則トスレハ
矢聲ヲ發ヘシ

前のことく駄納右手にて本弭を取弦を御前へ

なし左の膝を突右の膝を浮弓を常の如く末弭
より置右の膝より立扱左の膝を突右の膝を立
左手にて巻藁を押へ右手にて甲矢より抜根を
上にして巻藁臺にもたせ乙矢を抜右のことく

に置シ 祐方云矢ハ左ニ三度廻シテ抜ヲ法則トシタ

リ爰にて右膝を突角木を如常手挟右の膝より

立シ 祐方云右ノ膝ヨリ立ハ逆ナリ男ハ左ヲ順ト

右膝ヨリ立ヲ本座に帰り右の如く弓を取甲

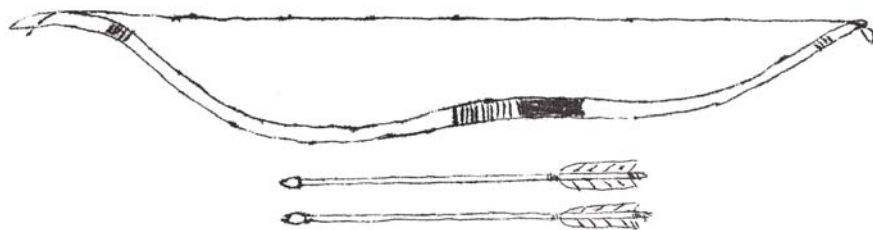
矢を番ひ乙矢を下に置右膝を立つくばひ常の

ことく弓構して打起し射放して右手を本弭に

掛常の如く弓を下に置右膝を突肩を入へし若
今一度と仰あらは前の如く射納て肩を入箭を
抜へし此時は矢を下に置へし口傳卷藁に弓矢
組付置軼事も有常には右の草にあるへし又云
正月軼初の時は其年の惠方に卷藁を飭り置吉
日良辰を撰み射初へし射時秘哥有口傳ト記シ
テ圖ヲ出シタリ尻ニ其圖ヲ模写ス見ルヘシ卷
尾ニ應永二十四曆八月十五日小笠原備前守持
長トアリ持長ハ足利將軍家ノ弓馬ノ作法ヲ主
タル家柄ノ人ナレハ射式ノ墨繩トモスヘキ書

ナレト文義ヲ考ルニ決テ小笠原家ノ古書ニハ
アラス持長ノ名ヲ借り用タル後人ノ偽書ナリ
冊号ヲ小笠原射式ト置タルニテモ知ヘシ持長
ノ書ナレハ只射式トアルヘキニ小笠原ノ三字
加タルハ偽書ノ証拠ナリ難用書ナレト今當世
ニ普ク用ユル所ノ卷藁ノ射様ナレハ右ニ掲カケタ
リ其節ニ當テハ用ヘキ莫モアリナン能々思惟
アルヘシ

胴結



祐方云弓矢ヲ置
タル圖也又胴結ノ
圖モアレト畧之

新造射場始

流傳曰射場ヲ新規ニ造リ是ヲ始テ射ヲモ射場
始共弓場始共的場始共云ナリ前章ニ述ル春ノ
射初モ射場始共弓場始共唱タレハ其名ハ同ケ
レ托異リタレハ是ト混スヘカラス今當矢渡ナ
ト共俗稱ス此新造ノ射場始ノ作法小笠原家ノ
古書等ニ不見當猶ヲ古事録ニハ不見既ニ東鑑
ニ建長四年十一月二十一日於新造御所弓場有
御的始兩國司以下出仕如作日射手十人各著水
干葛袴淺沓相分弓場左右著座將軍家出御之後

和泉前司行方召射手二五度射之畢退出云云ト
見ヘタリ新造御所ナレハサソ弓場等モ新規ニ
營レシナランカ此新造ノ射場ニテ弓始アリシ
モ射手八十人二五度射之トアレハ別ニ作法ア
リシ赴ニハ不見毎春ノ射場始ノ禮射ニ異ナラ
ス武射必用ニ矢場始といへるは故法多くの場
射場等の言分あり惣名矢場といふに害なし先
矢場を制して地祭をなすへし吉日良辰を撰ひ
塚の左の方に棚を設真中に洗米左右に置鳥置
鯉棚の前に菰二枚一張弓引目鏞を祭る尤瓶子

に神酒を供す雛形三十六枚長一尺二寸の竹に
挟雛形の内に

住吉の松より巢立鶴の子の千とせは今日や
始なるらん

と白書にして折へし陰陽の技ある根引の小松
に天長知久國家安全

君か代の久しかるへきためしにはかねてそ
うへし住吉の松

是を短冊二枚に書て左右の杖につけ雛形の傍
に置へし縄張終て後師たる人肩衣袴

官位アル
人ハ官服

ナ
ル
へ
シ
を
着
し
菰
の
上
に
座
彼
棚
を
拝
し
心
中
に
甲
弓
山
鬼
神
息
長
足
姫
尊
八
幡
大
神
と
勸
念
祈
請
し
別
に
弓
鏑
矢
を
取
添
打
つ
か
へ
塚
へ
向
つ
て
鏑
矢
を
放
つ
是
等
の
式
を
矢
場
初
と
云
な
り
的
始
と
云
は
矢
場
を
築
終
た
る
後
初
て
的
を
射
る
事
な
り
近
世
興
的
を
興
行
し
五
度
弓
等
を
執
行^ッ
正
月
射
的
初
を
も
的
始
矢
場
初
と
云
ふ
誤
な
る
へ
し
ト
見
へ
タ
リ
矢
場
始
ト
云
ル
ハ
故
法
多
ト
述
タ
レ
ハ
古
代
専
ラ
行
タ
ル
事
跡
ア
リ
シ
ニ
ヤ
前
ニ
モ
如
述
短
學
ナ
レ
ハ
新
造
ノ
射
場
始
ノ
作
法
古
書
ニ
見
當
ラ
ス
故
法
多
ト
記
セ
ル
程
ナ
レ
ハ

何帝ノ朝何將軍ノ時代何ノ年号ニ何ト云書ニ
出タルト其本證出所等ヲ明ニ記シタキモノナ
レトモ本證出所モ不顯故法多ト而已書タルハ
全ク故法多ク本證ナキカ故ナリ矢場始ノ故法
トヤラ云モノヲ愚ナル眼ヲ以テ熟見スルニ小
児ノ戯ニヒトシキ亼ニテ決テ古昔ノ武士ノ作
法ニアラス真言僧ノ佛法ナリ冊号ヲ武射必用
ト號タルハ何亼ソヤ書名ト所著説トハ大二齣
齣セリ右等ノ忘談ニ迷ヒ射術ノ本意ヲ失フヘ
カラス龜鑑トモスヘキ小笠原家ノ古書ニ新造

射場始ノ作法見ヘサル^レ 亘ナレハタトヘ高位ノ
人ノ新造射場始タリトモ知レヌ^レ 又亘ハ知レヌニ
テ耻ヘキニアラス物知リ^レ 貞ニテ新造スルハ實
事ニアラス時トシテ止^レ 亘叶サレハ東鑑ニ見ヘ
タル赴モアレハ春射始ノ作法ヲ用ヘテモ可ナ
ラン公事根元二十月五日射場ノ条ニ先此月の
三日に左右衛門弓場の堀をつく其日に天子ゆ
ば殿に出させ給て弓を御覽する也ト見ヘタレ
ハ弓場ハ兼テアリ堀而已築ル、亘ニテ新規ニ
射場ヲ營タルトハ別ナリ堀ハ雨雪ニ毎度觸レ

ハ崩易シ依テ毎年新ニ築直サル、ナリ是ト混
スヘカラス

御所的

流傳曰御所的ト云ハ天子ノ御所或ハ將軍ノ御
所ニテモ的ヲ射セ上覽アリシヲ云ニテ別ニ射
禮ノアルニアラズ正月射場始モ御所的也貞丈
先生云御所的トハ正月十七日公方ノ御所ニテ
御弓場ノ御的又常ニモ御所ニテ上覽アルハ御
所的ナリト云云鬮的聞書ニ御所にて鬮的所座
候時は弓太郎の故にてさいはいの的をもちりて

本ノマ、役カ

進上申物也トアレハ鬮的ニテモ御所ニテスル

ハ御所的ト云ナリ美久記ニ六左衛門筑後六左衛門ト云

ナモノ取テ返ス御所焼ト云聞元太刀ヲ帯タリケ

リ御所焼トハ次家祐方云次家ハ後鳥羽院禁中ニ召置シ番鍛治十三人ノ中

一人也秋八月當番ノ鍛治備中國青江ノ住權介ト号ス者也ト貞丈先生ノ説ニ見タリ正二

作ラセテ君御手ツカラ焼セ給ケリ公卿殿上人

北面西面ノ輩御氣色好程ノ者ハ皆給テ帯ケリ

筑後六郎左衛門尉都ヲ出ケル時今度ハケトテ

給ヒケリト見ヘタリ御所ニテ作タル太刀ヲ御

所焼ト云モ同義ニテ其所射ノ的ハ大的ニテモ

鬮的鬮的ハ尺二寸ヨリ以下ノ小キ的ヲ射也ニテモ惣而御所ニテ

射ルヲ御所的ト云ナリ又此名ノ見ヘタルハ尺

素往來二良一條禪閣兼御作也御所五番五度弓可爲往

古例候射手并弓太郎以下自兼日被定其人而本

間武田小笠原亦應其撰ミ由承及候弓馬故實ニ

御所的の時ゆかけにぬる物有と云事は温石を

粉にしてぬる也一段の秘事也笠掛聞書ニ今は

御所的はあたりをくるむる也ト見ヘタリ猶ヲ

尋ヘシ

百手的

流傳曰百手的ハ神事祈祷ナトノ時又ハ常ニモ

射ル也是ヲ百手的ト云ハ数塚ニ数串ヲ差テ矢

数ヲ等へ百手射ル故ニ百手的ト云也弓之記ニ

祐方云弓之記ノ記者詳ナラス伊勢氏ノ座右書
ニ年月記者不知奥ニ小笠原光清書同前トアリ

ト記サレタリ数つかの昔は矢をさして数をとる近年

也本ノマ、シカしのを祐方云しのトハ壺尺二寸にきり黒く

ぬりてたて矢数を知るはやの時は串の本を的

にむけ乙矢の時は弓立の方を向けてさす是一

段の秘事也百手的とも申百手の射事歩射の

習也程口傳ト見ヘタリ砂ヲ丸ク盛り数串ヲサ

ス塚ナレハ数塚ト云是レ数塚ト呼タル故實ヲ
知ヘシ百手の的ハ五尺二寸ノ大的其制ハ常ノ
大的ニ異ヘカラス射場ノ造様射手ノ装束等モ
大的ノ時ノ如シ射手ノ人数不定鬮的聞書二百
手の事人数はいくたり共定るましき也但大略
は十三人拾五人十七人など常に射る也又は大
より多も射へし二弓立に射る也十三人の時は
始の射手は七人二弓立めは六人如斯立へし丈
をおいて十五人拾七人も立候也人数十人とも
十二人ともあらは二に分て立候へし人数少き

時は一弓立にも射候也本式は一弓立共二弓立
ともなき事也先二弓立に立て射る事可敷一度
に立て射る時は射手草臥候也矢数くたびれもなき物也
二弓立に大略射る也矢代は始ふりたるまでに
てはつるた置也ト見ヘタリ人数不定ト雖大略
十三人十五人十七人トアレハ神事祈祷ノ時ナ
トハ丁数ヲ嫌ヒ半数ヲ用ユル亘ナランカ時ト
シテハ丁数ヲモ用ヘシニヤ十人共十二人共ア
ラハ二分テ可立トモアリ何レ人数イッハ定リナ
キ事也又射手弓立ニ立并ヘキ順ハ矢代ヲ振テ

人数ノ多少ニテ右ニ見ヘタル如ク一弓立ニモ
二弓ニモ射ル也一弓立二弓立ト云ハタトヘハ
十三人ヲ二分^ッ七人ト六人ニナル七人ナラハ七
人ノ射手ヲ一組トシ又六人ヲ一組トシテ弓立
ニ一組ツ、上リ一行ニ立並ヲ一弓立ト云ナリ
又矢代ハ始フリタルマテニテハツル迄置也ト
記シタルハ鬮的ノ如ク一度ツ、ニ矢代ヲフリ
不替始ニ振タル矢代ニテ終迄テ其マ、ニ置ト
云フ莫ナリ矢代ノ振様ハ鬮的聞書ニ百手の矢
代のふり様の事十五人射手あらは始は八人宛

立て射へし惣而十五人能程也矢代を打然はせ
す一つ、並へて置候也後の射手をは少あひを
しのけて矢代をふり候へし日記の付様は片名
つ、書て十五度宛に矢数を付へし始の射手も
後の射手も同様にて出猶し口傳有へしト見へ
タリ百手的ノ矢代ハ上矢下矢ト不組合一筋ツ
、並へテ振也又日記ニ片名ツ、書トハ名字ヲ
一字上ニ書テ下ニ丸ヲ十ツ、付ル亘ナリ官ア
ル人ハ官名ヲ一字書也此日記ノ付様精ク記シ
タルハ高忠聞書別記ニ百手日記付事

百手射手

名字一字我名一字かしらに書て下に丸を五十
つゝ二とをりにしてつゝにてあひをきりて
するなりはつれをくるむるなりこなたより付
るなり

名 十 十 百
○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○
○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○
○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○
○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○ ○○○○○○

此時十つゝならば十文字を書へしはつれなら
は只いくつと付なり

是はあしき也只百と云字残書やかて十つゝに

てすこし間ををくトアリ又弓法秘傳聞書二百
手の日記の事はつれの矢をはくろく星を可付

百手射手 年号 付年号にもまとおくに
月日 年号書なり

宗 〇〇〇〇〇〇 十 所此下まで付てつゝの人には

十文字を大きに書也十此字をつゝとよみ候故
也官途にても名乗にても一字可書候也ト見へ
タリ此余ハ弓場始大的ノ式ノ如シ中リ矢アレ
ハ度毎ニ再拝フリテ中ヲ答へ再拝ノ振様大的
ノ時ニ同シ猶ヲ委シクハ小笠原家ノ古書ヲ熟
見へシ

奉射

流傳曰奉射フシヤト云ハ神社ノ祭祈禱ナトハ時的ヲ
射テ奉射シテ神慮ヲナクサメル爲ニ射ルヲ奉
射ト云ナリ奉射ハ射テ奉ルノ意也コノロ又歩射ト書ホシヤ
テ。フシヤ。ト讀タレハ奉射ト歩射ト同意ナレハ
混シテ同様ニ心得タル者モアリニヤ射手方聞
書ニ歩射フシヤと申はかちたちの惣名也然れは田舎
邊には神事などの時六人して射るばかりをぶ
しやと心得たりあやまり也ト見ヘタルハ歩射
ヲ奉射ノ亘ト誤リタルナリ歩射ハ騎射ニ對シ

ツル名ニテ歩射ハ歩立射ノ意ニテ奉射トハ其
意味異ナリタレハ混ヘカラス奉射ノ的モ五尺

二寸ノ大的也的ノ制射場ノ造様常ノ大的ノ如

シ但シ奉射ノ時ハ弓立ニ数塚ヲ不築前後ニ菰

ヲ敷タルニヤ奉射大的記ニ

祐方云奉射大的記
八年号記者等不知

小笠原家ノ古書也
ト貞丈先生ノ説也

弓立時は前弓後弓見合て同

如く歩出こも二数の前のこもの敷本ノマ、合カ今の際に畏

り右の手に箭を取添て弓を持左の手にてひも

をとく也条し口傳有み也ト見ヘタリ此文義ヲ

以テ考ル数塚ノ所ニ菰ヲシキタルナランカ能

知ン人ニ尋ヘシ射手ノ人数ハ六人前弓後弓ヲ

定メ一番ツ、射テ三度弓也則同書ニヒトツカヘ奉射大奉

射之大的并的射之次第射手六人一番にて三度

宛射る也六人の矢数以上三十六也トアリ又射

手装束モ同書ニ出立之事上古はゑほし直垂に

てひからをはく也略儀にはゑほし上下にて射

也ト見ヘタリ烏帽子直垂ハ差知レラルモノナ

レハ其評註ヲ爰ニハ畧ス貞丈先生ヒカラハ沓

ノ名也浅沓ノ如ク皮ニテ作ル沓ノ鼻ヲ高シテ

鼻ノ上ニ糸ニテ雲形ノ如ク縫ヒシタル物也今

モ禪僧ノ長老ノハク沓ナリト云レタリ又上下
ト云ハ今當ノ上下ト云モノ更ニハアラス古代
上下ト云ハ上モ下モ同小紋ニ染タル布ニテ縫
ヒタル素襖ヲ上下ト云也上下ト小紋ノ替タ
ルヲ素襖袴ト云也又再拝振モアルヘシ日記モ
付ヘシ再拝フリ日記付ル更常ノ大的ノ如シ何
モ異ヘカラスト知ヘシ

鬪的

流傳曰鬪的ハ鬪ヲフリ射手ノ順相手ヲ定メ賭
物ヲシテ的ノ中リ外レヲ以テ勝負ヲスルナリ

鬮ノ制八廻日記口傳ニ鬮的乃鬮筒ノ寸法の事
鬮はぬるての木をすへし長さ五寸二分斗筒へ
入方を丸くうすく削て上へなる方をほそく巻
つりていまの丸所に一こ二ことさなから書也

祐方云鬮ニツ、同ヤウノ合シルシヲ鬮はいか
書也同鬮取タル人ト相手ニナルナリ

にも色をうつしてくあかうるしに薄くぬる也
同筒の事長四寸五分斗にしてふとき鬮さ斗入
程たるへし上を削りて黒くぬる也又鬮を取て
髪にさす也ゑほしの右の手の所にさすへしト
見へタリ本ハ此鬮ヲフルヲ射手面々ニ請取テ

我カ鬮ト合シルシ、人ヲ相手ト定メタレハ鬮
的ト云也後ニハ鬮ヲ止メテ矢代ヲフリテ相手
ヲ定ル亘ニ成タリ是レ矢代ヲフリテ相手ヲ定
ルモ鬮取ナレハ矢張り鬮的トハ云也鬮的聞書
ニくし的の寸方は本式なき物也但八九寸にも
一尺にもすへきか赤は一尺式寸にもすへしあ
まりにちいさきは勝負もなくてその曲もなし
繪出し様は大的のことしそれを置しすへしト
見ヘタリ鬮的ハ大的ニハアラス一尺二寸ヨリ
以下ノ小キ的ナリ射場ノ造様小的場ニ異ナラ

ス前章ニ出シタレハ互見スヘシ又射手ノ装束
ハ折烏帽子水干素襖等ヲ着スヘシ沓ヲハクヘ
シ是レ古代ノ例服ナリ扇ヲサシ疊紙ヲ懐中ス
ヘシ射手ノ人数ハ先十人ナリ十一人ニモ及タ
レハ数塚ヲコホツヘシ則鬪的聞書ニ数塚の有
時鬪的を射るに前後の通に矢代をふりて射へ
し少前へ出すへし射手は十人して射る也十一
人ともならば数塚をこをすへし弓馬三冊ニ数
さゝつる時も十人射るとは数つかを其まゝ置
て矢代をふりて射る也又云十人にふらは数つ

かをくつして矢代を可振ト見ヘタリ数塚ヲ崩
タル時ハ射手ノ可立弓セキ紛シキ故ニ前ノ数
塚ニ石ヲ一入置キ数塚クズシテモ其石ヲ残シ
是ヲ弓セキトスル亘射御持長記ニ見ヘタリ又
矢代振始ルハ其年ノ弓太郎也若シ弓太郎不参
ナラハ射手ノ中ニテ功者ノ人振始ヘシ弓馬三冊弓馬
故實小事ニ見ヘタリ振様ハ射手参揃面々射用意調タレ
ハ我力矢代ヲ持テ出又ハ人ノ矢代請取タル後
ニ知音人ヲシテ取寄テモヨシ弓馬故實ニ見タリ扱後ノ
数塚ノ通りヨリ後ニ退キ数塚ヨリ一杖ホト的

ノ方ニ進ミ寄りアツチヲ左ノ方ニ見テ少シ塚
ノ方へ筋違テ向テ跪惣射手ノ矢代ヲ持参スル
ヲ請取り皆請取タレハ其儘陸^{ロク}ニ能ク居直^リ矢代
ヲ一^ツニシテ引分引分三度分テ又一^ツニシテ能ク
交合テ右ノ手ニテ矢ノ羽ヲ上ニ撫テアケ又左
ノ手ニテ撫上ケ又右ニテ撫上ケ以上三度羽ヲ
撫上ケ右ノ手ヲ其マ、下ケ矢ヲ一^ツニシテ逆手
ニ持左ノ手ハ後ニ廻シ右ノ手ニテ矢ヲ後ニ廻
シ左ノ手ニ移シ根先ヲ右ノ方ニシテ立上リ数
塚アラハ前ノ数塚ノ通りのノ方へ弓一杖寄り

多人數ニテ數塚ヲ崩シ數塚ナキ時ハ大前ノ射
手ノ可立通りヲ見斗ヒ其所迄進出跪テ一弓立
ナラハ矢一筋ツ、二弓立三弓立ナラハ二筋ツ
、右ノ手ニテ取テ前へ出シ下矢ハ真直ニ置キ
上矢ハ根先ヲ的ノ後ノ方へ七八寸斗筋違へ下
矢ニ打掛置キ一足ツ、後ニスサリ次第々々ト
的ノ方ニ神頭丈進セ振丈後ノ射手ノ立通りヲ
限リニ振終ルナリ但シフリ終ノ矢ヲ我カ目通
リ持左ノ手ヲ神頭ノ先ニソへの的ヲ一目見テ其

マ、下ニ組合テ置ナリ鬮的聞書弓馬故實ニ見
へタル赴ヲ考へ記也

射手人数多少ニヨリテ一弓立二弓立三弓立四
弓立ニモ振ナリ一弓立ハ矢一筋ツ、並テフリ
二弓立ハ上矢下矢ト組合テ一通リフリ三弓立
ハ上矢下矢ト組合三分二前ニフリ少シ間ヲ置
テ三分一ヲ上矢下矢ト組合後ニフルナリ四弓
立ハ二ツニシテ一^ツヲ前ニフリ少シ退テ一^ツヲ後
ニフルナリ落子フリアラハ後ニ一筋ツ、フル
ヘシ上矢落下矢落ヲ態ニスレハ前組後組ノ後
ニ一筋ツ、フルヘシ若シ風吹テ矢代二組モ三
組モ吹散タレハ皆振渡タル後弓立ノ方ヨリ廻

リテ筈ヲトラヘテ直シ退ヘシ如此矢代フリテ
引退タレハ惣射手面々ニ右ノ手ニテ弓ニ矢ヲ
執添テ持矢代ノ際ニ進ミ跪テ面々弓立ノ順ヲ
見定メ一弓立ナレハ矢代ノ順ニスサリ弓立ニ
立並ヘシ二弓立ナレハ上矢ノ射手ハ弓立ノ際
ニ跪キ下矢ノ射手ハ本座ニ引取ル三弓立四弓
立ノ時モ是ニ准シ知ヘシ下矢ノ射手引取タレ
ハ上矢ノ射手ハ矢代ノ順ニ弓立ニ立並獨弓ノ
射拝スヘシ高忠聞書別記ニ見ユ前弓甲矢乙矢ヲ射朶肩入
弓ヲ取直シ中リ矢アラハ矢代往テ逆羽ヲ打ヘ

シ片矢中リナレハ下矢ノ神頭ト我矢ノ筈ト並
テ逆羽ヲ打ヘシ甲矢乙矢共中リタレハ羽大的
ノ方ニ出シテ逆羽ヲ打其マ、本座引取ヘシ中
矢ナケレハ直ニ本座ニ引ヘシ又次ノ射手モ前
弓ニ同シ後弓射朶上矢ノ射手皆本座引取タレ
ハ下矢ノ射手皆弓立ニ進ミ上矢ノ射手ノ如ク
前弓ヨリ後弓迄射朶中リ矢アレハ逆羽ヲ打本
ノ座ニ引取ル三弓立ナレハ三弓立目ハ上矢下
矢一度ニ弓立シテ前弓ヨリ後弓迄射朶ル更上
矢ノ射手下矢ノ射手ニ同シ一弓立ニテモ二弓

立ニテモ三弓立ニテモ一度射朶ナレハ中リ矢
ヲ調ヘシ上矢下矢ニテ四本中リ外ニ四本中リ
タル組ナキ時ハ其組勝ナリ外ニ二組三組モ四
本中リアレハ持ト云ナリ三本ニテモ二本ニテ
モ外ニナキ時ハ其組ノ勝ナリ勝タル組ノ上矢
ハ矢代ヲフリ直シフリ様始ノ如ク下矢ハ料足
ヲ集廻也是ヲ笠ヲ持ト云ナリ又獨中リ相手不
射時ハ矢取ニ料足トラスル叟モアリ以上鬪的
聞書ニ見
又人数少キ時ハ立アカリト云モノニシテ射ル
ナリ則鬪的聞書ニ鬪的の時立あかりにして射

るには矢代を一つ、ならへて振也矢代をなら
へて置間は羽の両方すれぬほとによせてなら
へてふる也始前に射たる人は射はて、我と矢
を一の跡に直て跡に立て今度は射る也左様に
次第くゝに射はて、は後へ矢代を取ては置て如
此立あかりにして射へし是は先人数すくなき
時如此射る也条し口傳に有へしト見へタリ立
アカリハ前弓ヨリ後弓迄射朶タレハ前ニ立タ
ル射手矢代ニ行ク其次射手第一前ニ進ム又第
三ノ射手第二ニ進ム如此順々ニ前ニ進ム故ニ

初度ノ後弓ノ跡一人分丈明ク二度目ハ此明タル所ニ初ノ前弓立テ後弓トナル又三度目ハ二度目ノ前弓後弓トナリ其次ノ射手三度目ノ前弓トナリ順々繰リ上タレハ立アカリトハ云也又弓馬三冊ニ小的を立て鬮的を射るも数をさして射也射手は拾人して五度射る也数は百也前の数五十也十人して五度の矢数百也矢代をふりて射る也先一番の上矢の人一番に前に立て可射下矢の人相手にて後に立て射る其次二番めの矢代の人一^ツかひ可射矢代の次第に五番

すて五度可射上矢の人は大前に立下矢の人は
うしろに有へし矢代を一番に振たるまゝに
て置いて五度か射十人にて一つかびつゝ、鬮的を
射る事数さす時に限たる事也是はことなる秘
説也日記次第に御的の如く座して数皮などを
も前後共に白毛を的の方へなして可敷数の置
所可数さすへき様歩射の時に前後共にかはる
へきにあらず是を式の鬮的といふ也五度弓三
度弓と云は似たる物にてかはる也射礼日記の
奥に注すト見へタリ此書ノ記者ハ武田伊豆守

信豊ノ武田小笠原ハ兄弟ノ家ニテ同流ナレハ
数串ヲサシ数ヲ取テ一番ツ、前後ノ数塚ニ立
テ大的ノ式ノ如ク射ル鬪的次第モアリシニヤ
歩射ノ時ニ前後共ニカハルヘキニアラストア
リ歩射ハ大的ノ隻ニテ今當モ歩射的ナト俗稱
セリ五度弓三度弓ト云ハ似タル物ニテカハル
也トハ式正ノ大的ノ五度弓三度弓ト云ハ射手
ノ精粗ヲ撰ミ一番二番ノ次第ヲ定メ五度弓ニ
モ三度弓ニモ射ルナリ鬪的ノ五度弓ハ射手ノ
精粗ニ不拘矢代ヲフリテ一番二番ノ順ヲ定メ

五度射ルナレハ似タル物ニテカハル也トハ記
シタリ又夜ニ入タル時ノ鬪的ノ作法其外落子
フリアル時ノ勝負ノ付様或ハ再拝フリ矢甲矢
取りノ作法等アレト繋多ナレハ別卷ニ譲テ態
ト爰ニハ畧也

三的

流傳曰三的ト云モノハ大中小ノ小キ的ヲ三ツ
三金輪ニ立テ射ルナリ射御持長記ニ三的の事
大中小三金輪に可立いつれも串一宛に小を上
に大なると中とをば前後に射手の好みにより

て可立勝負の事は小的はまく中はそれより少
く大なるは程少しの三の間へ入たる矢ははつ
れ成へし。鬪的聞書二三的の立様の事大なるは
後中程成は前ちひさきは一の上る立へし的の
寸方いか程とは定らす候但大なるをは八九寸
にもすへきか一寸斗つゝおとりて残り二をつ
へき也繪の出し様はされも大的をおいてすへ
しかわのまけ目を串のはさむ也串三にてはさ
む也委口傳有へし又は的を一宛串にてはさみ
て三かなわにしかと立候へしいつれと串上の

方へなる様に立へし。弓法秘傳聞書ニ或説に三
的と云事有大中小三ツかなわに立る也勝負に射
る時は小かけはまし中かけも二の次大は又此
次也そし是はかわに分て給常の如シ又串なと常
のことし三ツ立たる的の間也射入たるは外たる
へし矢とりはかならずく其心得有へし小的事
二三的の事的を三ツ立て射也射やう常の小的に
かはるへからす的の寸法ちいさきの四寸六寸
八寸三の的也大中小三也串は二所ても立る也
立やうは常のことし也。射御拾遺抄に三的の事

大中小三をならへて立也ならへ様小を上にな
して中大は両方の下になして立る也串は的一
に一ツ、あるへし但立様は射手の好みによる
事もあるへし三ならひたる的のあはひへ入た
る矢ははつれなるへし是もくしの時の事也
かけの事は小的をたかくして次第にそれをお
ふて沙汰すへしトアリ右五書ニ見へタル所文
義ハ少異アレトモ其意味ハ異ヘカラス三的モ
矢代ヲフリ射手ノ順ヲ定メ賭物ヲシテ勝負ヲ
スルナリの三ツ立大中小ニヨリテ賭物ノ多少

アルノミニテ是モ鬪的ナリ則小的事ニ射ヤウ
常ノ小的ニカハルヘカラストアリ常ノ小的ト
ハ鬪的ノ事ヲ云タル意ナリ又射御拾遺抄ニモ
三ナラヒタルノアハヒヘ入タル矢ハハツレ
ナルヘシ是モクシ的ノ時ノ事也トモアリ考ヘ
シ射様等其外ノ作法鬪的ニ異ヘカラズト知ヘ
シ又流鏑馬ノ事ヲ三的ト云ナリ則高忠聞書ニ
三的とは流鏑馬の事也又歩立に小的を三たて
、射をも三的と云なりト見タリ其名同シテ大
ニ異リタレハ流鏑馬ト混スヘカラス別ナリ但

此的ヲ三ツ立テ射ルニ愚意ノ赴アレトモ事長
ケレハ暫ク筆ヲ止テ爰ニハ評註ヲ不加

辻的 京的勸進的

流傳曰辻的ト云ハ勸進的京的江戸的ナト云類
ノ惣テ名也社地往來ノ市中ニ射場ヲ設ケ諸人
群集シテ的ヲ射レハ辻的トハ云也此的ヲ射始
タル起源詳ナラス射法一統モ兼應ノ比宗元ト
云シ者都ヨリ弓矢ノ商ニ武州ニ行神田ノ邊ニ
的ヲカケタリシニ四方ヨリ諸士集リテ射之射
アケノ日ハ大名モ御見物ニ御出ラレ其場キラ

ラカナル故ニ勸進的ノ中奥ノヤウニ申タリト
見ヘタレハ兼應ノ頃ヨリ昔ニ始リタルヤウ聞
タレトモ其證據正シカラサレハ如何アリシニ
ヤ信シカタシ又勸進的ト云ハ神社ニ寄進神納
ニセルモノサレハ社人矢本勸進元共ヲスルモノナ
レトモ弓射ル社人稀ナレハ射手社人ニ成替テ
矢本ヲ勤ルナリ中リ矢アリテ勝タル人ハ料足
ヲ三ツ分一ツ分勸進元ニ遣也其次第勸進能勸
進角力ニ類シタレハ勸進的ト云ナリ又是ヲ京
的ト云ハ京都ヨリ射始メタレハ京的ト云ナリ

京ノ字ト郷ノ字ト同音ナレハ郷的ト書テ附會
ノ異説アレトモ誤リ也此辻的ノ次第繫多ナレ
ハ別記ニシテ爰ニハ洩シタリ元來此等ノ的射
ハ小笠原家ノ余風ニテ後世ニ好事ノ族武術ノ
本意ヲ取失ヒ買職ノ者ト等ク弓矢ヲ翫ヒ物ニ
シテ私ノ作法ヲ設ケ辻的ノ式トヤラ勸進的ノ
式トヤラ京的ノ式トヤラ冑ルハ決カラサル亶
ナリ前章所々ニ如述將軍家ヨリ定ラレタル事
ナラテハ何ノ式彼ノ式ト云ヘカラサル義ナリ
今當ノ師範者ハ辻的ノ式トヤラ云モノヲ傳授

ノ様ニ心得テ容易ニ門人ニモ委敷ハ不聞笑止
千万ト云ヘシ

江戸的

流傳曰江戸的ハ東武ヨリ射始タルモノナレハ
江戸的ト云ナリ則射法一統ニ宗元ト云シ者都
ヨリ弓矢ノ商ニ武州ニ行神田ノ邊ニ的ヲカケ
タリシニ四方ヨリ諸士集リテ射之トアルハ江
戸的ノ叟ヲ云タルナランカ當射要録ヲ見ルニ
京的ノ次第ヲ少畧シテ子フリ、矢代ヲ跡ニフ
リ子フリノ中リハ甲矢ヲ二^ツ矢乙矢ヲ一^ツ矢ニシ

テ甲乙中レハ三^ッ矢ニナル京的ハ子フリノ矢代
ヲ前ニフリ甲乙中レハ四^ッ矢トシタリ弓置ノ勝
負ヲ畧シテ江戸的ニハナシ其外ハ大様京的ノ
次第ニ同シ是モ泰平ノ御世ノ翫物ニテ弓箭賣
職ノ者己カ職分ノ助ニ巧出シタルモノニテ決
テ貫革ニ志ス武士ノ所意ニアラス其次第ノ賤
キ以テ考ヘシ

射上

流傳曰射上ハ京的ニテモ江戸的ニテモスミタ
ル後日一寸八分ノ金星ヲ掛テ射ルヲ云ナリ其

次第射法一統當射要録辻的書ナトヲ見ルニ彼
ノ一寸八分ノ金星ニ早ク中リ矢アルハ福貴ノ
吉左右若シ一立ニテ流レハ不吉ナリ此時ハ金
星二銀星一三光ニ掛テ射ルナリ是ニテモ中ラ
サル時ハ金星四銀星三七星ヲ掛テ射ルナリ末
中ラサル時ハ又金星五ツ銀星四九曜ニ掛テ射
ルナリ何ニテモ中リ矢アレハ勸進元クギヤウ
ヲ持テ出テ其矢ヲ不拔星ニ貫タルマヽニノセ
テ神前へ備へ疊三疊敷其上ニ中タル射手ヲ上
座ニ置キ尊敬シテ勸進元ト盃ノ取カハシノ次

第アリ誠ニ小児ノ戯レニ等キ是レヲ射上ノ式
ナト云ヘリ如右三光七星九曜ニ星ヲ掛ケ孰ノ
星ヲ目當トモナリ徒ニ放タル矢ノ風來中リヲ
以テ射上星ナト、テ満悦セルハ何事ソヤ射術
ヲ學モノ耻ヘキ所ナリ能々思惟アルヘシ

三河的

流傳曰三河的ハ三河國ヨリ射始タル的ナレハ
三河的トハ云ナリ武射必用ニ三かは的の事は
俗間夷中^{イナカ}にて射初たる的の式故三河的と云と
云或は三河士の射始式故に三河的と云ふと云

へり非なり三かおとは三輪ッの事にて三ヶ輪的
なり一尺二寸的に一の黒二の黒三の黒と三
つの輪の繪を出す故に三ヶ輪と云となりト見
へタリ三河的ヲ三ヶ輪的トシタルハ強タル説
ナリ京ヨリ射始タルヲ京的ト云ヒ江戸ヨリ射
始タルヲ江戸的ト云モ同義ニテ三河ヨリ射始
タルヲ三河的ト云ハ易ラカナリ可考祐方云播
州姫治ノ
弓師小川猪左衛門カ話ニ参遠ノ二州ハ東照宮
ヨリ御免ニテ町人弓ヲ射ル今世モ盛ニ射ル也
ト云へリ此等ヲ以テ考合スルニ三河國ヨリ射
ハシメタルヲ三河的ト云タルハ正説ナランカ
猶尋
へシ

興的置的

流傳曰興的ト云モノ、射様ノ次第別ニナシ京
ノ字ト興ノ字ト同音ナレハ京的ヲ誤リテ興的
ト書タリ武射必用ニハ置的と云ふ射禮あり此
置ヲキの字興ヲキの字訓同じければかり用ひてかける
書なり興の音はきやうなり固茲興的レと誤呼し
を轉傳誤來つて京的とおぼえ又わけもなき妄
説を添たりと見えたり興的の礼式今俗間にあ
るところの京的の式に少もかはることとなし置的
を京的と誤ること時らけしそのうへ小笠原日

置吉田正流印西派山科竹林派雪荷派等にも京
的の書と云ものなし辻的書射的書というはあ
れと京的の書と云ものなし則印西派の辻的書
今俗間の京的をしるすかたし古來置的を興的
といふなり若右の流義に京的の書と題せる書
ありといは、後人の偽作なるへしト見へタリ
古來置的ヲ興的ト云也トアレト其證ナケレハ
難信置的ハ別ニテ興的ハ京的ノ誤轉シナリ則
辰清モ興的ノ禮式今俗間ニ在所ノ京的ノ式ニ
少モカハル無事云タリ考ヘシ又辻的書射的書

ナト号スル書短學ナレハ小笠原家ノ古書ノ中
ニハ不見當辻的ト云モノ始シ頃ハ詳ナラスト
雖足利殿ノ頃ニハ未ナキモノナレハ小笠原ノ
古書ヲ辻的書ト云モノアルヘキ様ナシ不穿鑿
ト云フモノナリ小笠原ノ名目アル辻的書ハ全
ク後人ノ偽作ナルヘシ又置的ト云モノハ當射
要録ニ置的と云は射手は二十人三拾人も或は
五十人百人もあれ射手の教程面々弦にても又
にても其外何によらず出し合かけ置也扱中次
第にかけ置物を取也片矢中りは我出したる物

を一人分取也如斯箴立も射手かけ物の有次第
取てかけ物ふ足にならば又前の如し懸合て置
也是を置的と云なりト見へタリ此置的ト云モ
ノハ京的江戸的ナト唱タルモノヨリ變化シテ
巧出タルモノニテ一向ニ近世ノモノナランカ
勸進的ノ類ハ珎シカラス此的ヲ新作シテ人ヲ
集メ今日ノ戲ニ日^ナ送タルモノニテ揚弓雀小弓
ヲ翫遊モ等^{ヒトシキ}ト知ヘシ

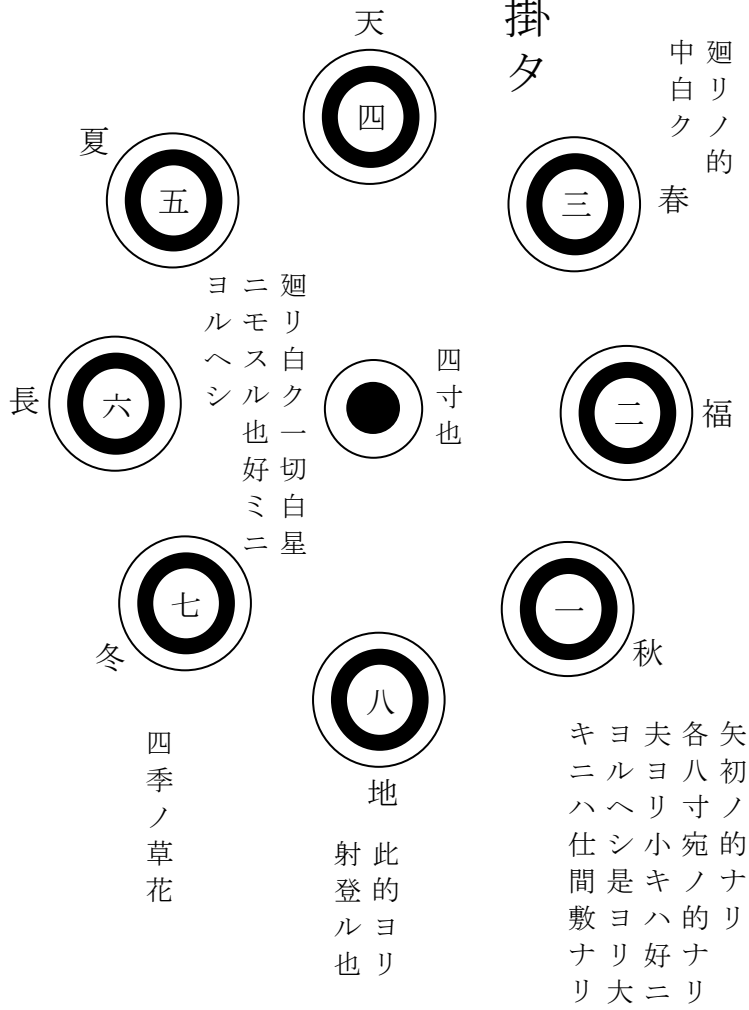
的星数々懸

流傳日的ト星ヲ数多並テ懸ル亘古クハ不見當

孰レ近世ノ事ト知ヘシ竹林派弓書ニ見ヘタル
所ハ星ヲ真中ニ掛ケ巡リニ小キ的ヲ八ツ九曜
ニカケ或ハ梅花ニ五ツカケ又ハ六ツ掛ケタル
モアリ又射登トテ下ニ大ナル的ヲカケ中ニ少
シ小キ的上ニ星ヲ掛タル圖モアリ悉々其圖ヲ
尻ヘニ出ス見ルヘシ此射様ハ的九^ッハ矢九本五^ッ
ハ五本六^ッハ六本以テ前ノ的ヨリ射始メ上ナリ
射巡リ末ノ矢ニテ星ヲ射ルナリ又射登ハ矢三
本ニテ下ノ的ヨリ射登ナリ若シ誤テ心眼サル
的ニ中ル時ハ過代ヲ出ス也是レ中ノ細蜜ナル

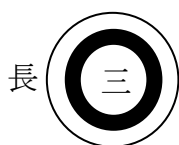
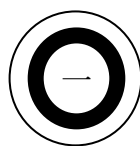
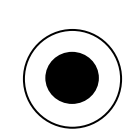
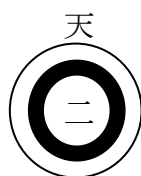
ヲ修行センタメナレハ憎ヘキニアラスト雖是
 カ爲ニ中リニ流レ弓ヲ弱メ調子中ヲセルハ甚
 タ憎ヘキ夏ニテ布而害ヲ求ルノ媒也實路邪路
 ノ境ニテ能々思惟アルヘシ

的星九掛夕
 ル圖也



梅花のノ圖

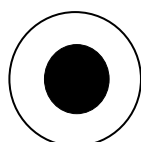
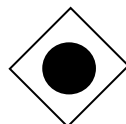
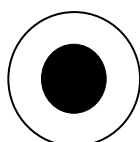
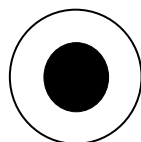
同好ニヨリ如此モ立也



矢初或ハ一尺名
四ツ共同断

此的ヨリ
射登ス

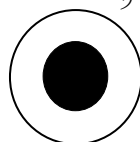
廻リカハ白廻リの八寸ノ時
ハ四寸一尺ノ時ハ五寸ナリ



矢初

四寸ノ的ハ如
此角ニモスル
ナリ

的
ハ五ツ立ツ時
ハ八寸不過也

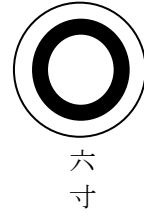


此的ヨリ
射登

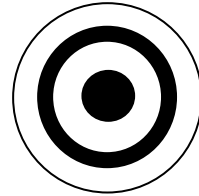
射登



四寸



六寸



八寸 矢初

此的六寸ニスル時ハ上ノ二ツ
ハ二寸ヲトル也其時ハ上ノ星
ハ白キナリ

右四品ノ圖ハ竹林派弓書ニ見ヘタル所ナリ是

モ近世ニユ出シタル事ニテ用不用ハ其人ニ有

ヘシ

勝負別的

流傳曰勝負ノ別的ト云ハ京的弓置勝負ノ時ニ

前中ニ勝負ヲ付勝トナル者アリ其時跡二人モ
赦ヘキ程ノ上手ニテ中モ細蜜ニテ下ケ針モ不
射外位ノ射手残り我カ射レハ必ス射モカント
残念ニ思ヒ不止尙前中ノ人ニ勝負セント所務
シテ勝タル者ト互ニ中リヲ争ヒ勝負ヲスル人
稀ニハアリ此時ハ是迄射タルハ不射脇ニ別
ニ立タル小キ的ヲ射ル尙則竹林派辻的書射法
一統當射要録ナトニモ見ヘタリ是ヲ勝負ノ別
的ト云ニテ外ニ射様ノアルニアラスト知ヘシ